

- 車海老の老翁
- 不二行者藤四郎
- 行人七兵衛

百家琦行傳貳之卷

八島五岳輯

○ 三井親和

親和も別号竜湖俗稱孫兵衛とよび東武深川町名今小居住して安永天明のころ信州の世ふ鳴るる能筆あり  
 殊小篆書とよむ一當時結ちりめんかゞに親和が書風の篆  
 書とよめぬ是と親和とあや号して大いふ流行しつり  
 りつ斯のいゝ女童やもよも知るるの書家あれも  
 書よりも猶やまゝりつるの親和が弓術あり二十三間堂通  
 矢あど毎く人の眼どかゞゆりつる最英雄ふしてつる小

物ふかつつゝぬ氣象あり當下深川三十三間堂大いふ破壊  
 して久く廢らげると能勢何ぐいもの是と再建せられり  
 が市中三老家々りも能勢との命ふよりこの堂乃備  
 額と寄進しつりて額の文字誰ふか知べしと評議  
 しつるふ三井親和が當時の能筆といひ殊ふ弓術乃筆  
 りる者あまらば三十三間堂ふ大いふ縁ありけり此人と  
 るめりて書びべしとて頼て親和ふ這度と物ぐりり三十  
 三間堂とうけて給ふべしと史くまらば親和頭とめりけり  
 三十三間堂とめりん史何とぞ拙く覺さつてふ外ふまらぬ  
 方ゆりり云りるふどたも右もよれふ史入ありと答りる

親和やがて這額ふ圓通とまらりめりる是も原三十三間堂淺  
 草ふ有しこれの額と土屋何ぐ候の御筆あり當下筆  
 道の達者といひ和漢の字才秀し御方あまらば願ひておん筆  
 とんあり這これの額とかわり圓通とめりり親和も  
 是ふありて圓通と書りるあり斯も三十三間堂落成して  
 通矢あまらりて看物の人々群集しつるふ當時  
 能筆の聞えある親和が額面とまらり知れも仰看て賞賛  
 せりりあつりり一日律僧二人來り這額と看り  
 大いよりいひて文盲の書とまらり是と守り別當も  
 沙汰のうだりの戲氣ありと十分嘲呼して去りり是



とほくく人々奈何ある訳とのふ支をまへ或老人親  
 和ふ會て語るとて曰く這やど律僧二人貴師の如く  
 額と看てもかきどせしむりや聞おらびぬ是れえの  
 三十三間堂淺草ふらふれハ安置の佛像らん喜言  
 薩おまふ圓通みて協て當般の三十三間堂と薬師如來  
 と安置ししむる圓通ふてら大いふまぐと疾く瑠璃殿  
 何と書正しむると云らふぞ親和聞て答ていふ  
 是大いふ理あり予は古きをまぐい古相如候の迹  
 とゆいて彼とてまぐめと堂をめぐんや観音の像薬  
 師と化てあらん一向ふつらり然といふもあは

今ついで一度志とめりあるゆゑと再び書かへる支那  
さへば仏像の方と鑄正びしとて夫より持僧ふか  
ひ若干の黄金と投りし鑄師ふ命じて薬師の像をか  
の手と鑄けけさせたる程ふ忽ち薬師如來千手觀音の  
生もろりせ給ひたり是を聞人々やとめりとあり亦  
も親和が共氣と感づる人もありしとて  
の一條を異同  
あるよりありしに  
あるは後人よりしき聞しきしに

○狂哥師裏住

裏住と原斯樂加波候の藩中にて久須美孫兵衛と云  
者あり由縁ありて浪人坂本町二丁目住して白子

屋孫右衛門と改名し唐更沙と制して活業し  
下りて本邦に唐より酒と制する人あり十分奇りゆれ  
ハ諸方より競ひつゝい來りて活業大いに繁昌し  
更沙屋孫とんと畧して人々更孫とていひ作り古主も  
直して御立入しとては更沙と制されて一室天井  
紙戸壁のとりけけ疊の縁まで残らば更沙とけり  
更沙の間とて御客次と修造し多ひたり這更孫一個の  
時人にてゆりたり俳諧をこのて勢賀とて本町二丁目  
紙屋にて俳名し平といふゆゆ無二の交りあり有る  
ふぞ後々同く本町へりり住ぬ當下江戸狂歌流行して更

孫も杵網と云く人の弟子ふありて狂哥と云く名を裏住と云く  
 かり亦し平とも勸て狂哥と云く名を秋人と号しつゝ  
 野呂間人形といふもの流行兩人も是と能つひ驚何  
 かし此門人とありて能の狂言最つりつゝかろしやぞ  
 一時秋人が裏住ふのふやう小生のうらまへ杵網子ふ知己り  
 あらば万望と云ひ逢せりといふ裏住聞ていせやばと  
 かり然し唯ひれ合え人もさうかろしん怎生ゆり終る對面  
 やう有べしと思案しと頓て兩人とも狂言の装立みく裏住ハ  
 末廣大名秋人と太郎冠者の姿小打扱二人とも町轎ふらり  
 乘て時々師走の十六日世間開し宛最中本町より西の蓮紙  
 百家二四

屋町杵網の隠宅まで行門口まで高聲ふものまうと叫りつれ  
 ば通次のさうと女出来と何方よりのゆへ入ると問をば裏住  
 のりもの裡ふありて是れ這一邊に往大名でござる杵網老  
 小御意得とさう侍と高声ふ云々のさぞ通次の女大いふ  
 おいそれ忽ち奥へ飛入杵網ふのうと告る杵網も不審ふ  
 かゆひ障子のす間と云ふのぞ見見を轎のうらまへ裏住顔ち  
 らし見えたるゆへに皆と渠と那事と云つて來と云んば  
 這方へ御しかりあきうらや婢女ふ云せやと云へ裏住立  
 急がしとさう座敷へ通し大紋の袖を合せ長衣の  
 裾ひれざり直と狂言の言はく這うらふ仕大名

S



でござる 查綱老へ 太郎冠者と知己ふせんとおもひ 故意同伴  
 のござる 太郎冠者ありや呼ばれバホウリ とのり  
 る 秋入太郎とるじやの姿も奥へありたる是より始終狂  
 言ふて 秋人と 查綱ふ扯合せたる 查綱もさる者おもて 同ト 詩  
 みく 知己ふありぬ人の傘とさるあつて我もさるふとさる  
 廻り 小時中ひありぬる 家裡のめはへ 勿論あり 近隣の人々  
 ちども 跑来りて是と見物し 大笑しとありふたる 夫さりの酒  
 宴あり終日さひ 樂しとて 裏住る平生さるは 行状ふ  
 る 生涯おのり 強く暮らさる 寛政元酉年の春 黄門定座  
 五百五十年忌 御追福京都 ち 執行せらるる 不はる東武

誦連俳ふら我ふ輩ハ手向の詠と奉上べしやして然堂上方より  
 江戸諸方御殿ごとあざとくも縁ごもやめく仰下され  
 一更あつたり一這更と聞て何とぞ狂言師も歌を奉上り  
 もあつたりと菅江の綱裏住等のひ合せく二十人あはり歌  
 集あつたり短冊小認め縁ごもやめく京都へおつたり  
 後あふの御沙汰もあつたり同く八年辰八月十五日日本町の王屋  
 九六席といふ高家の店頭小裏住あそび居りしと或人扇二  
 三片もち来て是ふ歌うけて給ふやといふ裏住何ぞらあつたり  
 百ふ歌とあつたりやめく處へ旅僧二三人這店への買ふまへり  
 今裏住が書くる扇と看ていやく怪しく容子あて此言を

貴どの詠もつらふやと問う住答ておのまづ詠あり  
 といふ旅僧們大いふゆゑゆき小僧輩ハ陸奥ゆりのあつたり五  
 年前より京都ふのかり大井川の北靈龜山聖禪寺と号し  
 ころろふ佛学い候ひしが當般飯國のゆきつる洛中  
 看物のほい今出川万年山天禪寺塔頭普光院ある黄門  
 定家卿の御廟處お泰詣と侍ひし正面小高位の御詠三十  
 六員の顔面あつちの中ふ

鶯も蛙もかまへりあつたり経もむもりう唯あつたり

詠人不知とあつたり狂言あつたりいふゆゑ何人乃  
 御詠あつたりやめく只管あつたり候ひき足下當下這あつたり書れ

とらと看て初とこの詠めりと知ぬ万望と我門少るかきと  
給ととて個々扇とゆめゆめと多くかくせし持去りとと  
裏住六十一歳のとれ新吉原大文字屋の楼上とて薙髪は文棲  
七十人餘子の遊女ふ一刺刀つせきとせきと落髪は裏住が事ふ  
つとつとハ百般の話あはれども大とつとつと畧は

○董堂敬義

敬義字と伯直別号小笠本町二丁目中井清助といふ者の  
子あり俳名とて平ととび狂名と秋人といひ一然と狂  
哥の俚きと嫌ひととと書と最能筆と安永天明の  
あのごとつと専らせし聞えとと書家あり老年ふとびてハ

はとく名高く門人も太多く常小諸家一も宜しとて只言尊  
敬せられり然れども主家金吹町とて一通ひ勤る支壮年のとれ  
より些少も谷子とてかへ常小書牒の出口とつとつある風雨の  
日とつとつと急慢は河内木綿の袖とつとつと短き衣服を着  
蒙履のとつとつと通ひとつとつと高名といつとつと主家とと  
ふとつと支斯の若一人とつとつと心得とつとつと事とつとつと有る

○三組町字三右衛門

湯島三組町といつとつとと三とつとつと云者あり一常小釣  
とつとつと事と好と一日職と木履と作とつとつと亦と勤てつとつとつと錢と  
得む夫とつとつと飯とつとつと食具とつとつと腰とつとつと結びて出せのつとつと人限



一日毎釣して遊びたり一日職と做ぐ三日と釣し三日職と勤む  
まば十日と釣して遊びたり性魯鈍ふ似て無欲あり一日舟ふ  
て釣せんと申ひ深川の知音の舟舎ふくはく舟一艘のみ  
自親櫓ととりて漕ぐ沖つて釣しるのそくろくが  
夕暮ふりりて立地一迂の暴風おろり雨ち篠と竹くが如  
く波と大山の崩る若く子三三のんが釣つても今や海底  
沈みおんと一向ふ生るあちもあく唯念仏して船端ふりり  
はと居る時ありて風雨志はまうりも空ち雲おひ  
暗夜おもふ東西分くつる舟とよほべの的あく唯つひの  
浪と汲り流ふ住ぞく居るる天曉ちうくありて空晴

とかくはるるち一箇の湊ふ着るりりり登るる那里と  
問へ上総の國木更津とつる處あり這土地と江戸より上総  
へ渡海はる舟着の地あり人々子三三のんと見ておもひき  
待馴ぬ身といひ釣舟うく二十里の海上と恙あく流る來  
るる子三三のん舟の裡より釣棹ととりつる一邊乃岩  
頭ふ尻もちかけて亦釣せり樂けり當日と這てくじ  
次の日も猶釣し遊びたり左右して三日と過り  
今ハ裏裡むああり初ておらき漸々江戸へ渡海乃  
船と看つけくちと史く便舟一の小舟の後ふり



幸うじて江戸へ歸りて亦一時深川辺へ行釣して遊ば暮  
 夕暮ふゆいび只有材木の間とのどろろ見えん何うあそ  
 赤らめの見ゆり時節沙々かろまば子三あめん何心かく  
 手と指つてしと扯つて看む一回の包袱ありひささく水  
 底へ埋もつりや見えん十分汚もつり其つとと披見  
 る中へ一回の財囊あり財囊の裡へあぶら百兩り外へ  
 薄秩一とあり久く水中へ沈みありとゆゑ大甚しくあり  
 て文字一向ふ分とぼつとどり僅ふ我の裏へ行徳何の八幡  
 宮神主某神主の名  
今忘ると記とつと看薄秩の中へ江戸近郷の  
 さまの人々の姓名と記とつと當ふ是講金まで把あつて物